まちがったシンジくんをエヴァパイロットにしてしまった

鰹節の丸煮

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アスカーッツ!!　俺だアーッつ!!　ＥＯＥしてくれーッツ!!!

もしシンジ君がほんの少し素直（ただし感情的に）だったら、もー少しは皆と仲良死でいれて、殺し愛を心置きなくできたんじゃないかな～と思った。というかシンジくんがシンエヴァで大人になってしまって悲しい、もっとこう……　ＥＯＥしろよ！

そんなまごころを、君に。

目　次

少年と怒り ―――― 1
所属と愛の欲求――少年と少女たちのイケない関係 ―――― 4
少年の歪なアイ――はらぺこわらべ ―――― 15
少年の歪なアイ――ねえさん　おへんじ　どうしたの ―――― 24

少年と怒り

怨(じょ)

シンジは激怒した。必ず、かの邪知暴虐のマセたメスガキを除かねばならぬと決意した。シンジは世事が分からぬ。シンジは尋常たる一介の中学生である。生まれてから少しして母を亡くし、父には祖父母のもとへとやられて以来手紙の一通、電話の一本たりともらったことがない。ゆえに愛には人一倍敏感であった。

つい数週間前のことである、シンジはあの善人気取りのくせしてその実、田舎者なことこの上ないいけ好かない祖父母とその息子のもとを足蹴(あしげ)にするようにして旅立ち、野を超え山を越えトンネルを通り空を飛んで、ここ第三新東京市へとやってきた。

シンジには母もいなければ妹や兄もいない。一人っ子である。友人は腐れ縁といったほうがいいやつが一人いたが、互いに〝坊っちゃん〟〝山嵐〟と呼び合う程度には鼻つまみ同然の扱いを周りから受けている有様であった。

この友人はシンジが祖父母のもとを離れるときに唯一、見送りに来てくれた人間であったが、その時に餞別としてくれたものの内に高橋洋子の秘蔵カセットテープこと、『ファリィア　セタメッソ　ファリィア　トゥスエ』とやらがあった。シンジはこれを一生の宝にするとその時に誓った。またその時に友人から彼の住所と電話番号の書いた紙の切れ端をもらったから、なくす前にと自分の手帳にそれを書き留めておいて、そのうえで件(くだん)の紙は昔買った懐中時計の蓋の裏に張り付けてやった。

(この懐中時計はシンジが自分で小遣いを貯めて、さびれた時計屋で買ったものである。いわゆる若気の至りで、使わないままため込んでいた金を憂さ晴らしにパァッと使ってやろうと思って買ったのだが、これが意外と値段のかいはあったということなのか、日付曜日をあらわしてくれるような使い心地がよいものであったからズルズルと使い続けている)

だがそんな友人のくれた秘蔵のブツとやらは案外トンチンカンな

代物だった。蓋を開けてみればそのテープにはイミ不明な怪音声が収められたのだった。それらはおそらく友人の声によって読み上げられていたのだろうが、その声は異様に幼くつたないもので、そんな声が舌足らずな発音で異世界の言語そのものといってよいような気味の悪い文言をただひたすらに読み上げているのである。

そうして最後に、成長したいつも通りの友人の声が唐突に「だいぜんじがけだらなよさ、にみやぺェジ」といやにゆっくりと発音して――テープは終わるのである。

シンジは正直これを一生の宝にしたことを後悔した。

けれどシンジは一度決めたら頑として変えることのないことで有名であった。

中学校始まって初めての席替えで自由な席に座ってよいとされ先にシンジが座ったというのに、その後からさもおまえが邪魔でおまえが悪いのだと言わんばかりに「席ゆずってくんない？」といってきた女子に対しては紳士然としながらも、はっきりと厭だと応じた。俺たちの方がおまえより人生満喫してるからと言わんばかりにその後にまた、席を譲れと笑顔の裏で暗に求めてきた先ほどの女子の彼氏っぽい、クラスでも屈指のイケメン（体格もいい）には、オマエにはぜってー譲らねえよ、と面と向かっていってやった。

もちろんそれをすればクラスで自分がどんな立ち位置に置かれるかはシンジも十分に理解していた。彼の愛読書には重松清も多分に含まれていた。

その結果、あぶれ者の友人ともいえぬような腐れ縁な男と青春を浪費する羽目になっても、シンジは懲りやしなかった。

この第三新東京市にきてもそれは相も変わらず、転校してすぐに校舎裏へと呼び出しを食らい、お前のせいでワシの妹がケガをしただのなんだのと因縁をつけられたときには、思わず苦笑いしつつも「君が兄（あに）ちゃんの責務を果たせなかったことを僕に八つ当たりされても困るね」なんていって挑発して、そうして売り言葉に買い言葉からの大乱闘になっても、シンジはけっして屈しやしなかったし何度手加減なく殴られようが、遮二無二食いついて絶対に負けたなんて認めなかっ

たし、最後まで「ごめん」なんて一言もいってやらなかった。
碇シンジという少年はどうしようもなくそういう人間であったのだ。
だから彼はその不気味なテープを相も変わらずもらったときと同じようにプラスチックケースに入れ、自分の机の中に彼なりに大切に保管していた。友人が別れ際にテープと一緒にくれた『寺山修司少女詩集』も一緒に、「肩」のページに挟まれていた葉っぱの葉脈を模している金色(こんじき)の真鍮製たる栞もそのままにしておいて。
で、あるからにして。それらが自身の居候しているとあるズボラな女性の借りぐらししているコンフォート21たるアパート、その一室にある廊下に机の引き出しに入れておいたもの一切とともにぶちまけられて粗末に扱われ、「廃棄」されていたのを見つけたとき、碇シンジは激怒した。

所属と愛の欲求――少年と少女たちのイケない関係

もとより、シンジはこの新世紀において社会問題となっている〝キレやすい〟若者、その典型であった。

彼があの傲慢自儘な父親に「来い」の一言でこのよくわからん近未来感ハンパないけど物価は高いわ、パリや田園調布みたいに理路整然とした街並みというわけでもなくよく道に迷うわ、自販機にペプシコーラは売ってないわ……、となんか気に食わない町に来させられて、そうしたらいきなりえヴぁとかいう超巨大人型ロボに乗って、やはり超巨大なシトとかいう化け物と戦えといわれて……、ときた時には、当然のごとく遠慮なく、シンジはキレた。

激怒までではない。まだ自分で自分を客観視できる、我を失っていないぐらいの怒りの感情の発露をみせたのだ。

おもにエヴァの爆走という形で。

結果、第三使徒は自爆するまでもなく、その体の上でホップステップダンス（ただしは舞台（ATフィールド）は踏み抜くものとする）を心置きなくかまされて、仮面からコアまでを手ごねならぬ、足ごね挽き肉（ハンバーグ）にされた。第三新東京市――使徒迎撃要塞都市とかいうらしい――は八割がたその機能を損失した。ネルフ広報部が「これは南海トラフ大地震である」と発表せねばならなくなり、一発で嘘だとばれた上に、それでもその発表を支持した日本国政府はその支持率を地の底にまで落とし、政権交代は確実とまでいわれるようになった。

つづく第四使徒との戦いにおいてはエヴァを両足を拘束した状態で戦うことを義務づけられたので、碇シンジはいわゆる〝目からビーム〟をふざけて「波動砲発射用意、ターゲット・スコープオープン、電映クロス・ゲージ、明度２０（ここで片手づつ、指で輪っかをつくり両目にそれぞれあてる）、セーフティ・ロック解除（ここでオペレーター伊吹マヤ、渾身の叫び「許可してません!!」）、エネルギー２００パーセント、元気百倍友達一人、発射十秒前、発射（ゼロ）!!」といってブッぱなした。

結果、使徒は蒸発した。ついでに発進許可が下りずに第１７番発進ケイジに固定されたままだった初号機から、正面前方１５７キロメートルに至るまでの地域一帯が後塵に帰し、政権が交代した。

そんなわけでシンジが本来ならば住むはずであった、ネルフ本部によって用意された住居は跡形もなく蒸発したのでこうしてシンジは否応なしに彼の上官たる艶麗な女性、葛城ミサトの住まうアパートことコンフォート２１に居候しているというわけである。ちなみにコンフォート２１の屋上からは荒野、更地と化した新都心（笑）がおがめる。むしろコンフォート２１のみが依然として屹立しているまでもある。碇シンジはのちにここもぶち壊しゃ良かったと後悔した。

……どうにもシンジのこの処遇には司令（ド腐れオヤジ）から直々（じきじき）にそうするようにと作戦部長たる葛城ミサトに指令があったらしい。

十中八九どころかどう考えてもシンジの監視が目的であろう。そう思っていた時期がシンジにもあった。だが今思うに、もしやただの嫌がらせではないのかとすら思えてくるのだった。それほどに、碇シンジは葛城ミサトとの生活において神経をすり減らしていた。

というのも葛城ミサトはズボラもズボラを極めたようなダメ人間であり、その部屋は汚部屋そのものでしかなかったし、日々の食事はなんでこの女こんなに美人なんだろうとシンジが不思議に思うほどに粗末適当なものだった。もちろんそうした不始末はすべてシンジがどうにかせねばならず（なにせ本人にしてみればそれが当たり前であり、平気なことなのである）、そうした中でシンジは『怒るまい怒るまい、自分は居候させてもらっている身なのだから……』と我慢に我慢を重ね、同時に苦労に疲労に疲弊を重ねてきた。

そうしていたら、その家主はまるで捨て猫でも拾ってくるかのように新たな同居人（厄介）を迎え入れたのである。シンジには何も話すことなく。

だが問題は、まず対処するべき問題はそんなことではなかった。

その野良猫こと、一人のメスガキ――名前を式波・アスカ・ラングレーというゲルマン娘――は非道（ひど）いにもほどがような、じゃじゃ馬なんてかわいいほどの傍若無人ぶりをみせたのであった。

その最たる例が、シンジの気になっていた異性たる存在こと、綾波レイたる少女に喧嘩を売ったことであった。シンジはこのときから、この式波・アスカ・ラングレー（イキリ散らしメスガキ）のことを内心で（喧嘩）売女と呼ぶことにした。バイタと読んだ方（かた）は非道い方だ。シンジは名字がケンカ、名前がウリオンナであると認識してやまないというのに、なにを勘違いしているのだろう？　べつに日本語的には間違っておらず内包している意味合いはまったくもって真っ当なものである（とシンジはほくそ笑みつつ信じている）うえに、売女（ウリオンナ）を別の読み方をするならアカスとかいうらしい名前と同じ三文字である。何の問題が在ろうか？

いやない。

ちなみにシンジは〝瓜女（ウリオンナ）〟と、彼の人生において一、二を争うほどの美少女たる異性のことを何の頓着もなく呼べることに密かな悦びをおぼえている。ここまでの矛盾を人一人にたたきつけられる快感はいかんともしがたい。彼（シンジ）は何の根拠もなく人のことをこうまで（内心であっても）罵倒できるほど、人でなしではないのだ。だがしかし、聡明なる読者諸氏ならお気づきだろうが、このシンジはかなりの性格破綻者である。（ふつうあそこまでクソな〝先生〟とやらに育てられたら、こうなる。）

ゆえにここまで人という存在をコケにできるチャンスをくれたアカスという少女には、一種の感謝の念すらもいだき始めていた。ムカつくのである、偉そうなヤツと、偉くないのに偉いヤツが…。イヤ…もう、好きなのである。好きだ。

しかしながら、そんな愛すべき少女アカスであっても碇シンジは聖人ではなく、それゆえに時には自分を制御できなくなることもある。このとき――シンジがこれまで一生懸命に掃除・整理してきたコンフォート21の葛城ミサト宅が一面を段ボールに占領され、自分の部屋であった場所がアカスの部屋であるとアカスによって一方的に宣言された時、そうしてあのムカつく大声とともに部屋からシンジの荷物が次々と投げ出されてゆき、ついには友人からの餞別たる品々が抜き出された引き出しより、ザーッと廊下の冷たく堅い床へとぶちまけられた時――

碇シンジは激怒した。

（＃＃　▪言▪）

その次の日が国連空軍エース、式波・アスカ・ラングレー大尉の第三新東京市立第一中学校における初の登校日であった。

そうして彼女がひそかにながら、わずかにながら、それでも確かにその胸にいだいていた初々しき憧憬――異国からやってきた優麗秀美たる美少女にして、隠そうにもあふれ出んばかりの知性・教養に満ちた天才少女として、転校生として、もてはやされつつ健やかにクラスの仲間たちと過ごし、いつかは親友となるような、そんな人間と巡り会うような……。あの寒々しい日々の中で、一人で、減ってゆくなかで生き残るために生きてゆく日々の中では叶わず、それゆえに今の自分には赦された、ついに現実となること――は叶いそうにもなかった。

なにせ第一印象からして最悪だった。

サード（「そうとしか君には呼んでほしくない」とアイツは言った）のせいで泣き、腫れた目は寝ても（本当にただ寝そべって寝ただけだけど）あんまり変わっているようには見えず、笑顔をうかべようにも未だに昨日の晩のサードの言葉が一つ一つ胸に突き刺さって浸食し、炎症を起こしているかのように、じくじく、じくじくと痛むせいでどうにも顔がひきつり、思ったように笑えなかった。

クラスにつくまでに、教室までの道のりでも自分のどこかうわずっている呼吸音が酷く煩わしかった。

教師にも気遣われてしまって、それでも意地で、教師の「転校生の紹介があります」なんていう言葉の後に、ざわめく教室へと足を踏み入れた。

とたん、クラス中の視線があたしに集まった。

「君なんか誰かに受け入れられても、その見た目のおかげでしかないさ」

サードの昨日の言葉がとたん、頭に響いた。

「なにせそれ以外が嫌われても仕方がないことばかりだもの」
「可哀想に、わかっているくせに」
「だれかに大切にされたことがないんだね」「その頭をなでられたことは？　好きだって、愛してるって言われたことはある？」「自分にしか誉めてもらえないんでしょ？」
「ぼくはきみがキライだね」
「……その調子でみんなに嫌われればいいさ」
「しってた？　好きの反対は嫌いで、嫌いだからこそ無関心なんだ」
「ああ、でもみんな優しいから、君は君のままでいいのかもしれないね。もしかしたら君にもやさしいお母さんとお父さんがいて、そのおかげで君はそうなのかもしれない。だとしたら、ごめん。うらやましいよ、……僕は生きてる父親にすら、見向きすらされないんだ。母さんなんていないよ。何だよ、ほら、聞きたかったんだろ?!　……ほんとうに、うらやましいよ」

あのとき、ミサトもなにか言おうとしてくれたけれど、サードのこの一言で喉にモノ詰まらせたみたいな息苦しそうな顔のまま、固まっちゃった。

サードは本当に怒ってた。言うだけ言ったあと、あたしの目を舐(ねぶ)るようにその両目で見つめた。

あたしが何もいえないでいたら、サードは、あたしを見捨てるみたいに廊下へと向き直って、あたしが散らかしたアイツの荷物のうちで、古くさいカセットテープと一冊の本をひろいあげて、大切そうに、ほんとうに大切そうにリビングのテーブルに置いた。

そうしてミサトに自分が悪かった、うるさくしてすみませんっていって、詫びて、明日の学校は休んでいいかと聞いて、あたしに部屋の荷物をどけるから、リビングかどこかにいるようにって言った。

でもサードは一度も大きな声を出さなかった。あたしが手伝うって言おうとしたら、小さく叫ぶように、はきすてるように、っていうのだろう。「いらないよ」っていった。

結局、わたしは眠れなかった。眠ったら悪夢を見そうだったから。ミサトのところに行った。行って、なにもいわないでって言って、一緒に寝て、少しだけ、ほんの少しだけだ、ほんの少しだけ、泣いた。

朝になって、あたしが少しこわごわしながら廊下に出て、そうして元々は物置だった、今はサード――碇シンジの部屋である、狭そうな、廊下のはじっこにある何となく、どことなく寒々しい部屋のほうを見ると、その扉は開いていて誰もいないとわかった。

ミサトはすでに起きていて、いつも通りふざけたみたいな明るい調子で、「きょうはワタシ謹製の朝飯よん♪」なんていって消し炭みたいな代物を意気揚々、自信満々に出すだけでなく、それをあたしの目の前でバクバクと食べてみせた。

わたしも、すこしだけ齧ってみた。

食べれたものじゃなかった！

（ーーー）

「式波さん？」

担任の女教師があたしのことを心配そうに呼びかけた。知らず知らず、気圧されそうになっていたみたいだ。

「大丈夫です」あたしはそういって、にやっと楽しげに笑ってみた。

笑えた。ミサトの料理下手も、役に立つことがあるんだなと思った。

教卓の近くにまでいき、クラス全体を見渡す。クラスの視線はあたしに総注目。それに気づくと、あたしの顔が自然とほほえんでみせた。

そうしてあのサード……碇シンジとやらはいないかとクラスを総

攬してみるに、空席がぽつりと一つ。逃げたか。内心で鼻で嗤ってやる。

と、今度は本当に吹き出してしまった。

あの不愛想女、あのファーストこと、綾波レイが、こう、もう、形容しがたい……お母さんが赤ちゃんをあやそうとするかのような、「あばばばばばっツ」とでも言い出しかねない変顔をしている!!

ヒーひ^ーヒィ〜……なんてふうな、妙な笑い声しか出てこなくて、あたしは思わず教卓にひじを突くようにしつつ、腹を抱えた。するとクラスの連中もファースト……綾波レイのことに気づいたらしい。男子はどいつもコイツも目を丸くしたり、目をこすってみたりする。女子も戸惑いの声をあげつつ、誰からともなく話しかけはじめる。綾波レイは淡々とそれに答えつつ、それでも変顔をやめず……ついには委員長らしい女子が止めに入る。

そうしているとこれは逃せないと言わんばかりに、一人の小柄気味な男子がどっから出したと言いたくなるような厳つくデカい一眼レフカメラ（フラッシュ付き）をスタイリッシュに、机に土足で片足をあげ、もう片方の足では椅子の上に立ち、無駄にかっこいいスナイパーっぽいポーズをキメて委員長の制止をいっこうに気にしない綾波レイの変顔を撮影しようとした。

「ナニやってんのよ、このヘンタイ!!」

思わずそういって、ソイツの席までいって、脱いだ片方の上履きでソイツの後頭部をひっぱたく。「ウバァツ!!」なんて悲鳴を上げて、その男子はアタシのほうを見やる。

「ケンスケ、おんどれナニやっとんねん!!」そんな変な口調をした声とともにその頭に拳骨が落ちる。みれば大柄なジャージ姿の男子が小柄な方のメガネ男子の後ろに陣取っていた。

メガネ男子はズレたメガネを片手間に直して、ジャージ男子に文句を垂れる。「なんだよトウジ、お前さ、あの綾波レイの変顔だぜ!?　もう世界遺産並の価値しかないでしょ、公的永久保存だよこれは!!」「死にさらせアホウ!!」今度は延髄切りっぽい技がジャージ男子から放たれる……。

みれば綾波レイは今度はお澄ました風でいて、まわりの女子から質問責め。委員長なんてそのほっぺたをさわって、肌ケヤのコツを聞き出そうとしてるみたい。

と、とにかく、アタシのことはなにか忘れ去られてるっぽいけど、まあ、もう、いいか。

そうあきらめて席に着こうとすると、またしても綾波レイが注目を集めた。

今度はその、さっきまでプニプニされ放題だったほっぺをリスのごとくふくらませて、アタシのことを見てる。

「な、なによ……」

「アスカ」綾波レイは相も変わらず、文字通りふくれっ面のまま。

「貴方は誰？」

ハア…、なんだろう、禅問答だろうか？　それとも、ここではもしや言うべきでないことをこの女……

アタシはあっけにとられて綾波レイを見返す。

すると担任がパンパンと手をたたいて、いう。

「はい皆さん、ではお静かに」

あたしはそれで、まだ自己紹介もしていなかったことを思い出した。

（ーーー）

半分愛してほしい。残りの半分で、黙りこくって、紅い海を見つめるために。

半分愛してほしい。残りの半分で、己について考えてみたいのだ。

半分でなくてはいけないのだ、全部はこわいから。

全部であってはいけないのだ、どうせ理解されないのだから……。

全部をあたえて、そうして全て捨てられてしまったときの空っぽな自分こそが恐ろしい。裏切られたってかまわない、傷つけられたって

かまいやしない。けれども信じさせるのだけはやめてくれ!!　君とぼくは解り合えやしないのだからーー人間であるかぎり。
約束がキライだ。信頼がキライだ。信用なんて重々しい！
（約束は守ってみせる。信頼を、信用を決して裏切らない）
愛は苦しみだ。優しさは猛毒だ。幸福は罪悪だ。
（愛してほしい。優しくありたい。幸福がほしい）
嗚呼……。嗚呼……!!

「碇君」無機質なはずだった声が自分を呼んでいる。
「綾波？」
ふりかえるのも億劫で。自分の願いを聞き届けてくれた少女にお礼をしなきゃいけないのに。シンジは相も変わらずうつむき気味に前を向いて、うずくまったままだった。
「学校、おわったわ」背後の声はやはり淡々という。
「アスカは、どうだった？」
「相田くんや洞木さんと……」そこで、声はやや戸惑ったようだった。
「ああ、いいんだよ。……ありがとう。綾波」
シンジはやっと立ち上がった。
ズボンの尻についた砂埃をおとして、ポケットの中に財布があることを確認して、少女に向き直った。
風が吹いた。潮風では、なかった。
「なぜ、ここに…？」綾波レイは眉一つ動かすことなく、そう尋ねた。
「本当は、海を見たかったんだ」シンジはそういってふたたび振り返った。
芦ノ湖がこのセカンドインパクト以後の世界では世にも珍しい、碧い湖水を湛湛（たんたん）とたたえていた。そよ風が吹き、湖面にさざ波をたてた。空を見上げれば、蒼い。満面に空色がゆきわたり、雲一つなく澄み渡るような快晴である。
「空が海みたいだ」シンジはそういって何かを和らげるように笑った。
「空が、海？　空は空じゃないの？」レイはさも不思議そうに聞いた。
「わかっているんじゃない？」シンジはまたレイの方へと体を向けた。

顔は空を見上げたまま、レイの方にはむこうとしない。
「……そうね」レイはシンジを一瞥して、目をやや伏せたようだった。
「いきましょう」そういってレイはシンジの手をとった。その少年にしては細い腕は、濡れて湿っていた。

「アスカには一緒にあやまってあげるわ」
「でも、僕は酷いことをいったんだ」
「それだけじゃないでしょう？」
「……うん」
「なにがあったのか、きいてもいい」
「僕が、話すよ。だから、聞かないで」
「いいわ」
「僕は、ぼくは、あの子が好きなんだ」
「……でも嫌いなのね」
「うん」
「いつか好きになれるわ」
「でもあの娘(こ)は僕がキライだ」
「貴方が嫌ったから、貴方が好きだったからよ」
「もうどうにもならないよ」
「いいえ、明日があるなら、何とでもなるわ」
「ぼくは、ぼくはあの娘(こ)のことを、酷く、非道く、ひどく、とにかくヒドいことをしたんだ」
「貴方しかできないことでしょう、それを挽回することも」
「それでも、僕なんかどうしようもないよ」
「自分が許せないのね」
「救われたくないんだ」
「罰せられたいの」
「そうさ」
「そう」

「ねぇ、碇君」
「なに、綾波」
「救うことが、貴方の罰よ」

少年の歪なアイ――はらぺこわらべ

年をとったら、人形と一緒に暮らしたいと思います。
歌ったり、浴槽に入ったり、ホフマンの童話を読んだり、レスボスの果実をむさぼったり、ぼくの肩をもんでくれたりする、自動人形たち、沢山と。
パリのサンジェルマン。リュニヴェルシテ通りにある小さな人形屋の店先で考えました。
ぼくは人形となら、うまくやっていけそうだ。
だが、ぼくと暮らす人形たちは、セルロイドや蝋細工では困る。
キャロルの写真集に出てくるような、血のかよった人形がいいのだ、と。

寺山修司『人形たちの夜』

碇シンジも朝は早い。もとより中学生にしてみても早いほうではあったけれども、この日は特に早かった。
学校をその日休んだのはただセカンドチルドレン……式波と顔をあわせるのが辛かったからだけではなかった。
シンジはその日の晩、ほとんど寝ることができなかった。はじめは式波にキレたせいで頭が煮えくり返るように沸騰していたせいで、そのあとはだんだんと冷静になるにつれて自分がまたやらかした……と表現する程度ではすまないほどの罪を犯したと思えて仕方がなかったからだった。
そんな罪の意識はシンジの胸を厭(イヤ)になるほどに締め付けた。心臓が脈打つごとに頭の中で不安定な渦が渦巻き、波打ち、のたうち回り、ツゥーん、ウゥーっッーン!……と不快で身の毛がゾワゾワとするような……脳内がすべてヒッかかれたガラスの音のように気味が悪い、心地の悪い、、、、彼の世界がグワングワリと宙に浮く!! ……地をかいくぐりぬけて廻り、凌駕し、渦巻きながら一点へとむかって収縮し、

収束して、いつの日かを待ちきれないままにユックリ、ノッタリと彼にふりそそぎ、、、、そうしてやはり決められていた場所へと落ち着こうとして、破裂してすべてを台無しにする、、、、繰り返し、繰り返し……。

気づけばシンジは学生服を着て、リビングに立ち、紙の切れ端にいくつかの葛城ミサト宛のメッセージを記していた。行きたいところがあるので、今日は学校を休むこと。行き先についてのメモ。いつぐらいに帰ってくるのか。朝ご飯を作らずに行ってしまうけれど、昨日の残りがあるからそれを温めてもらえればいいということ。（どうせミサトのことだから失敗するだろうとふんで、そっとレトルトカレーをリビングのテーブルに出しておいた）何かあれば電話してもらえればすぐに駆けつけるということ。勝手なことをして申し訳ないという詫び言……。

これっぽちも眠れなかったというのに目はぱっちりとしていて、頭は冴えたままというのが、自分のことであるというのにヒドく気色悪く思えたのを覚えている。自分が未だに冷静になれていないのはわかっていた。それでも、この家にいることは、彼女にこんな気持ちのまま再び顔を合わすことは、煩わしかった。きつかった。痛々しくて、たまらなかった。

（ーーー）

綾波レイに手を引かれて、あやされるようにして芦ノ湖から自分の家というべきなのであろう、コンフォート２１のあの部屋へと戻った。

綾波レイは道中では、静かに何かドイツ語らしい文字でかかれた本を読んでいるばかりだった。なにもいうことはなかった。ただ、バスを降りるとき、電車から降りるとき、だんだんと第三新東京市に近づいてゆく、その節目節目においては、「碇君」といつも通りの口調で、ただまっすぐとシンジの目を見て、その色白で肉細な手をさしのべた。

碇シンジは心中でそんな綾波レイのすがたに――シンジの一歩先を先導しつつも決してシンジのことを見捨てようとしないような、冷淡をよそおったようなその思いやりを秘めたその背中に対して酷く罪悪の気持ちをいだいた。同時にいいようもない情けなさばかりに苛まれた。

自分を嫌悪しつつ、蔑視しつつも綾波レイという少女の優しさにすがりつく自分をみとめ、どうすればいいのか、どうすべきなのか、そもそもどうしたいというのか……そんなことばかりに思いを巡らせていた。

そうして、第三新東京市駅に電車が到着したとき、碇シンジは綾波レイに言った。列車の中へとさしこむ、斜陽の天光が車内を茜に染めていて、綾波レイの皎々（こうこう）とした肌すらも今なら常人と同じように見えた。

「あやなみ、ねぇ」声がうまく出なかった。喉が、渇いていた。

「なに、碇君」綾波レイは相も変わらず、手に持った本へと目を落としたままだった。

「あ、綾波、降りないの」

「碇君は、どうするの」

「……どうするもこうするも、ないよ」

なにせここは終点なのだ。

降りることが乗客には義務づけられている。それが乗った者であるかぎりの、契約なのだ。

線路はどこまでも続くなんてことは絶対になく、分岐したとしてもいずれは終着する。そうしてこの駅はそのうちでもっとも大きな（ターミナル）モノであったにすぎない。つくられたレールの上を走る者には、終着が約束されている。

「降りよう、綾波」

「……いいの？」綾波レイは静かに問うてくる。

「結局は僕らはレールの上に、造られた道の上にいるだけだ」

「そう……わかったわ」

綾波レイは静かに席を立った。碇シンジはすでにたちあがり、綾波

レイのまえに立って手をさしのべようとしていた。
「……碇君？」
「あ、ごめん」碇シンジは自分でも、己の為した行動に戸惑っているようだった。
そうしてやはり戸惑うように、おどおどとその手を戻そうとする。
「まって、碇君」そういって綾波レイはシンジの手を、溺れる者が藁をつかもうとするかのように、それでいてどこか怯えるように、それでもしっかりと掴んだ。
太陽が過ぎ去ってゆくように車内はふたたび薄暗くなった。
うつむき気味な綾波レイの顔色はシンジにはどうにもわからず、彼女の空色の髪ばかりが暗い中においても相も変わらず鮮やかな色彩を発しているのが眼に入った。
自分の男らしいとは到底いえぬ、細っこい腕の先に付属するかのようなやはり女々しいくせに節々ばかりが骨太の手……それにゆだねるかのように重ねられた白皙（はくせき）のやわらかで、たおやかな、あたたかい手……。
「……綾波……」
「外、行くんでしょう」
「……うん」
だが碇シンジにはもう、正直そんなことはどうでもよかったのだ。
ただ、彼女のことを、綾波レイのことを抱きしめたくてたまらなかった。
自分のことを不器用ながら、不慣れながら思いやってくれる彼女のことを。
そうして、謝りたかった。
芦ノ湖の淵でだれも彼もが自分をおとしめようとしているのだと疑い、罵倒し、うらみ、ねたんだことを。そのなかで彼女を勝手に〝裏切り者〟としたことを、〝偽善者〟と決めつけたことを。実のところ彼女が自分の〝お願い〟を無感情に一蹴してくれることを期待していたことを。
それでいて彼女が自分の無理難題を――式波のことをどうか、どう

にかクラスになじめるように、あるいは式波がクラスで彼女なりに楽に過ごせるように、どうかうまく取りなしてくれないか……なんていう、お願いというにはあまりにもムチャクチャで要領をえない、泣き言じみた、それでいていってしまえば自分の犯した罪の尻拭いにちがいない……そんな〝お願い〟を――叶えてくれることを、どこかで期待していたことを。

綾波レイという少女のことをどこかで、都合よく扱っていたことを。

結局、僕はなにも変わっちゃいないんだ。あのときから、ずっと。

そうして、いまだって自慰（オナニー）じみた感情の衝動で、彼女のことを欲している。

なんて、愚かで、あさましいのだろう。卑しい。

「……いこうか。……ごめんね、綾波」

こんな言葉一つで償えることじゃないことなのは、分かっているけれど。分かった気でいるだけかもしれないけれど――そんな言葉一つすらいえない奴には、なりたくない。

そう思うことすら、おごがましく思えてしまったけれど。

碇シンジはそれでも、綾波レイの手をひいて、自分の居場所たる居心地の悪い窮地へと舞い戻る。

それはなぜかと問われるのなら、碇シンジは自分がまだ子供にすぎないからだと答えるだろう。自分の居場所を作ることができず、まだ決められたレールの上を進むしかない子供であるからだと。

同時にこう答えるだろう――もしかしたらこれも自分自身に対する言い訳なのかもしれないと自嘲しながら――決められたレールの上すら進めない者が、自分の線路を造るなどどうしてできるというのか？　自分は線路の作り方を学ぶために、あるいはそれができるような大人となるために今を過ごしているのだ、と。

（――）

「ねぇ、式波さん。碇シンジ君って知ってる？」
　そうふとクラス委員長たる女子――洞木ヒカリはいまクラスの話題の中心たる転校生の美少女こと、式波・アスカ・ラングレーに尋ねた。そうして、その返答はすぐに、率直に、かつ大胆に得られた。
　ボッファアッ→　と当の少女は飲んでいたタピオカミルクティーを文字通り、吹き出した。それでもタピオカ本体が飛び出すのは乙女の意地で抑えたらしい。吹き出す際もヒカリの方向に向かないように、瞬時に顔の向きを変えたあたりに彼女の優しさが垣間（かいま）みえる。
「な、なんでわたしとアイツが――」
「〝アイツ〟ってことは、知ってるんだ」
「言葉の綾よ!!」
　そういって机に備え付きの紙ナプキンで机に飛び散った茶色い滴を拭く。スタバのあの銀色のストイックな丸テーブルの表面がすこし濡れた以外はそもそも店外の席であったから、近くには他の客もいなかったしそこまで大変なことにはならなかった。
「ねぇ、式波さん。碇君てどんな子なの」
「……ただのガキよ。あんなヤツ」
「ほんとうに？」
　そういってまた一口ミルクティーをすすりながら、尋ねる。ちょうど上目遣いみたいな具合になって、地味ながらかわいげがある。そばかすですらも、赤毛のアンみたいな良さがあるみたいに思える。なんというか、どうにも憎めない。
　ほおずえをつきなおして、相手の顔をあえて見ることもなく、店の前の道を行く人々に目を向けながらも見ているわけでもなく……、そうしながら、訥々（とつとつ）と答える。
「ま、ね。あたしも悪かったのよ。あいつの大切にしてるっぽいモン手荒にしちゃったし」
　そうして、昨日の晩の顛末を話す。どうにも、話さない限りは離さない、みたいな目をしているからこれは仕方がないと、いわば腹をくくったのだ。なにがそんなに必死にさせるんだか、なんて思いながら。

「……じゃあ、式波さんはこれから帰ったら碇君とまた顔をあわせなきゃいけないの？」
「まーそうね。しかたないわよ、なんせわたし、エヴァパイロットですから」
「うん、それはなんとなく分かってた」
「ちぇー」
「……碇君、今日学校こなかったよね」
「まーだ怒ってんでしょ、ほっんとうにガキよね。いやまあ、ワタシも悪かったですケド」
　でもそれでキレて、それでいて頑固ムーブなんて大人げないわよねぇー、なんて水を向けてみる。
「ね、式波さん。碇君がそこまで大切にしてたのって本と、あと何かのテープっていってたよね」
　そうするといきなり、もとからクリクリとしていた大きな目をことさら大きく、キラキラとさせて、まるで秘密の内緒話でもするみたいにその体をあたしの方に寄せてくる。
「そ、そうだけど、なによ」
「どんな本だった!?」
「ええっと、なんだっけ、あの、寺元うんたらの少女詩集とかいうヤツ……」「寺山修司の『寺山修司少女詩集』ね！　へぇ～、碇君そんなの読むんだァ、じゃあ、やっぱり……」
　ええと、とりあえず、近い。んでもって、息が荒い。なににここまで発憤してるというのか。
「ね、式波さん。もしかしたら、もしかしたらね、その本とカセットテープとやらは碇君にとってほんとうに大切なものかもしれなかったかもしれないのよ」
「いやどーゆうことよ」いやどーういうことだ、本気と書いてマジで。
「もしかしたら、それって初恋の娘からの……ね!!」
　……いや、「ね！」じゃないでしょ、それを懇切丁寧に大切にしてる

方が、なんというか、キショい。
「キモくない？」口に出てた。
「えぇーっ!?　一途で可愛くない!?　いいなあ、もしそうだったら碇君、すっごいいい子じゃない、鈴原なんかとは大違いもいいところよ。それに相手の娘もなんていうか、すっごい、すっごい健気！　碇君、自分から来たくて第三新東京市に来たって感じじゃなかったもの！　もしかしたらまだ連絡取ってるかもしれない。はっ、もしかして今日とかもその娘のところに……」
……はいはい鈴原鈴原。というか、
「ありえなッ!!」ありえない、ありえなすぎ!!
というか相手の娘とやら、粘着質すぎない？　しかも今日いきなり来られたって相手も面倒でしょうに。なに？　なにで慰めにもらいにいってんだか。むしろあたしを慰めろよ、謝れよ、こちとら泣いてんだぞ。しらんだろうけど。
「そおう？　碇君、こっち来た直ぐの頃はけっこう明るかったのよ、話すと面白いし。学校休んだのも今日が初めてじゃない？　――綾波さんとかと、よく話してたのよ」
「レイと!?」おもわず大声が出た。
そうよ、とそばかす気味の頬にぴんとたてた人差し指をあてて、首をかしげてみせる。
「綾波さん、ずっとお人形さんみたいで、それで、その、まあ、無愛想だったりしたんだけど……、ほら今日なんてあんなふうにしてみせたじゃない」
「ああ」
それであたしは今日のホームルームでレイのみせた変顔を思い出す。……なんというか、あれは、うん、もうやっちゃだめなやつだった。
「ああいうふうになったのも、碇君が綾波さんに話しかけはじめてからなの。このごろなんて、ときどき笑うのよ、ふふふっ、て」
「女子なんてどうにかしてウケさせてみたいって言う子ばっかよ。ぜったいいい顔して爆笑するはずだって。男子も、なーんか怪しいの

よね。相田君なんて隙あらばあのごついカメラ構えてるし、鈴原なんて！　芸人魂がもえるで！　なんていってあのきったない変顔とか妙ちきりんなポーズに格好をすんのよ？　このまえなんて髪ワックスで全部逆立てて、コーラを頭に鬼のツノか何かっぽく着けて「どや！　これが本当の怒髪天抜き!!」っていって同時に両方のふたを開けて、そうしたら中身が一気にブシューッて吹き出して……。おかげで教室がビチャビチャ!!　でも鈴原ったら中身は強炭酸水にしてたから、ベタベタにはならなかったんだけど……、なーにが「人様に迷惑はかけん！」よね、アイツ、わざわざ強炭酸水さがしに駅三つ遠くのほうにまでいったっていってたわ。――バカよねぇ」

そう一息に舌もかまず言って、またミルクティーを一口。

……こいつ鈴原のこと大好きだな……。あのジャージ封建的頑固男のどこがいいんだか。

「まー鈴原のことはいいとして」

「へぇ〝っッ、そ、そうよね、あんなやつのコト!!　……ええとでね、綾波さんなんだけどね、このごろはあんまり碇君と話してないの。というか綾波さんからときどき話しかけにいって、碇君もすこしは話すんだけど……そっけないの。ううん、誰に対してもそう。あのね」

そういってヒカリはまたあたしの方に、今度はおどおどと、近くに知っている人がいたときのためといわんばかりに手で口元を隠し、顔を近づける。

「碇君ね、みんなから嫌われてるの」

少年の歪なアイ――ねえさん　おへんじ　どうしたの

ネルフ――国際連合直属非公開組織　特務機関ＮＥＲＶは世界各国にその支部を擁するほどの規模を誇り、その権限はもはや超法規的といってもよいもので有事には国家の政府すらも従える。そうしてその本部があるのが日本国の次期首都とされる第三新東京市の地下、箱根大深度地下大規模空間（ジオフロント）である。地下であるというにもかかわらず昼夜が存在するこの場所に、現代風闇のピラミットと表現するのが適当であろう外観をしたネルフ本部の建物は不変といわんばかりに存在している。

そうして忘れてはいけないのがネルフという職場は本来は優秀な国際公務員たちが集う高給にして週休二日完備の超ホワイトな生業（なりわい）であったはずなのである。

実際、使徒という存在――使徒殲滅を目的とするＮＥＲＶという機関にとって必要不可欠な存在――が襲来するまで、ネルフの職員たちの仕事は安泰にして普遍なものだった。ときおり要塞都市だとか人造人型決戦兵器たる巨人だとかいう怪態（けったい）なモノが入り込んできたりしたが、それらにガッポリ浸（つ）かり込んでいる人物もおおいにいたが、それでも大半の職員たちにとってみればありふれたお役所仕事と、異常事態にそなえた訓練……その繰り返しの日々こそが日常であったはずなのだ。

つまるところ、彼らにとってみれば残業とは強いられてすることでは決してなく、あくまでも自発的な福祉（ボランティア精神）の精神、あるいは克己（こっき）心から為される行動であり、それに対しての報償もまたしっかりと支払われるものにちがいなかった。

だがしかし、使徒という存在がいざ襲来してくるようになると――ネルフの本部のあだ名は〝ピラミッド〟から〝エピタピオス（墓の上に）〟に

なった。
なにも使徒という存在の脅威をその身をもって知り、怖(おそ)れを為した故のあだ名ではない。ネルフ職員――それも本部付きの者とくれば、城ならぬネルフ本部を枕に討ち死にする覚悟などとうに持ち合わせている。なにせここを使徒によって突破され、ジオフロント中心部のセントラルドグマへと侵攻されたのならば――サードインパクト、人類滅亡の序章が幕を開けるのである。人類のために身を捧げると決めた者の、人類のために身を捧げると決めた者たちによる、人類のための組織――それがネルフなのだ。
ではなぜそんな陰気ぐさい名前が栄光あるネルフ本部にあてつけられたのかというのなら、そこでは至る所で、あらゆる者たちが、いつまでも働くものたちが酸鼻の極みなる様相――どこをどうとったとしても、服を着ている以外は墓場から抜け出してきた亡者、あるいは枯骨(ここつ)そのものな姿――をみせることこの上なかったからである。
と、いうのも彼らは使徒の先鋒たる存在――第三使徒の襲来した日からずっと、ずうっと、ずーっと、いつになっても、いつまでも、どこでも、どこまでも、働いて、勤めて、刻苦精励し、身を削り、骨を削り、精神を疲弊させ、働いていたのである。残業は労役、苦役の代名詞として、ネルフにおいてやっと世間一般の意味合いを取り戻しつつあった。今のところはまだ残業手当は出ているけれども、このままいけば所謂(いわゆる)サービス残業が同調圧力の名のもとに行われることは火を見るよりも明らかなことであった。

（ーーー）

すべてはエヴァ初号機とその少年(パイロット)によるところであった。
まず彼らは第三使徒襲来に際し、初の実戦であったにもかかわらず――とくにパイロットは全くのずぶの素人であったであったというのに――みごと殲滅してみせた。また初号機には一切の損害がなかった。
しかしながら戦闘における被害は甚大であった。つまり、エヴァ以

外はハチャメチャなことになった。おもに第三新東京市が、である。
具体的にしめすのならば、対空迎撃用兵装（ミサイルＶＬＳ兵装ビル・５４口径１２７ｍｍ単装速射砲積載型兵装ビル〈対空砲台　Ｃタイプ〉・６２口径三インチ後装式ライフル砲横列積載型連装式兵装ビル〈汎用砲台　Ａタイプ〉・ブローニング１２．７ミリＭ２Ｅ２重機関銃　単装及び連装式対空砲座・ラインメタルＭＧ３汎用機関銃　等）を未完成のものもふくめて五割五分ほどを再起不能にし、一般人（とはいえどネルフ関係者にはちがいないのだが）の居住区を第三区から第七区まで竜巻が通ったような惨状に仕立て上げ、所々（ところどころ）で局地的な断層のズレや地盤沈下を引き起こし、ついにはそれによってありとあらゆる交通網――鉄道はもちろん高架道路から一般道にいたるまでをすべて台無しという表現そのものにふさわしい有様にした。
またインフラを半壊させ、市の住民たちには自衛軍による自発的な炊き出しがおこなれたほどであった。しかしながら、本来そういった対処をすべき当の市役所はまさにエヴァ初号機が第三使徒の体の上で踊り狂った（そうして踏み抜き、踏みつぶし、捏（こ）ねた）現場であり当然ながら原型など土台すら保っていないような、建物の破片すらも残らず砂になるまで踏みのめした、まさに大きな砂場そのもの以外の何でもない有り様になったため、その当時はもちろん、いまになっても行政の建て直しは不完全であり、はっきり言ってしまえばほとんど住民たちによる自治政府状態である。
こうして第三新東京市はたった一回の戦闘で実質〝八割〟の損害を負うことになった。
そうして第四使徒は難なく、仕掛け花火のような迎撃をあしらいすらせずに第三新東京市へと侵攻し――エヴァの〝目からビーム〟をくらって蒸発した。
しかしながらこの一撃は第三新東京市に致命的な被害をもたらした。
まずこの〝ビーム〟とやらはのちの分析によればＡＴフィールドを偏向させたものであるらしいと推測されたが、いってしまえばプラズマのようなものであったらしい。このプラズマが地球磁場と相互

作用し、磁気圏内へとはいってから磁力線にそって地球電離層へと高速で向かい、大気圏の粒子と衝突したことによって大気粒子が励起(れいき)状態と化し、それが元の状態に戻ろうとしたことによって、第三新東京市上空には真っ昼間から鮮やかで神々しい孔雀色をしたカーテン状のオーロラが出現した。

これが、悲劇、あるいは惨事の幕開け、その合図であった。

まずオーロラにより引き起こされた電磁波の変動によって、変電所の変圧器に誘導電流がながれて壊れ、第三新東京市全体において大規模な停電が起こった。電波障害が起こり、いたるところで電話、無線のたぐいが不通になった。もちろんインターネットも使えなくなり、人々は一斉に情報を得る、あるいは連絡を取る手段を奪われた。これにより伝聞による噂、デマすらも貴重な情報として扱われるようになった。

避難指示もおぼつかず、シェルターも稼働しなかった。(これは後にジオフロント内の非常発電器により多少は回復したが、それでも完全にとはいかなかった)すでに第三使徒襲来のときに行政は崩壊し、いまだ立ち直れていなかった(これまでの災害に対して明らかに人手不足この上なかった警察は各地から増援を呼び寄せていたが、それが急すぎたことでかえって指揮系統の混乱をもたらした上に、先の使徒襲来時から市民救援を目的とするといい張り居座り続ける戦略自衛隊との縄張り争いもおき、ほとんど身動きがとれていなかった)こともあり、多くの住民がネルフ関係者であったため上下のつながりというものが存在していたので、そのつながりで大小さまざまな自警団が組織された。

プラズマにより幻覚症状を起こした者によってＵＦＯの目撃情報が多数よせられ、そののちには幽霊がでたという噂が広まり、ついには集団ヒステリー、あるいはパニックとそれによる暴動が各所で起こった。プラズマにより出現した火の玉が新たな使徒だというデマがまことしやかに扱われ、ついには警察による控制(こうせい)も力及ばずに半ば蜂起じみたデモが起こった。

ネルフ本部の誇るスーパーコンピューターシステムにして第７世

代有機コンピューターこと、ＭＡＧＩも一時システムダウンし、このためにこれまでのデータなどが一部失われたりした。それでもすぐといえる程度で復帰することはできたのだが、そのとたんエヴァ初号機が先ほどブッぱなしていた分の電力（日本総発電電力にして三日分）を非常用発電器から直通で吸い取るようにして惜しみなく「奪い去った」（赤城リツコ博士談）のでふたたびダウンした。ジオフロントですら真っ暗になり、（やはり）当然ながらネルフ本部は機能を停止した。

こうして当のネルフ職員ですら現状を把握しきれなくなったとき――

エヴァ初号機は動いた。不死鳥のごとく、ネルフ職員たちの不屈の奮闘により二度目の復活を遂げようとしていたＭＡＧＩは死んだ。

濃青に生物学的な黄緑をした部位を併せ持った、巨大で異形というにはあまりにも、あまりにも人間的な設計を為された身体（からだ）が固定されていたはずのケージから抜け出した。固定するはずだった拘束具、ロックボルトのいずれも無気力に外れ、あるいは解除されてゆるみきっていた。いきなりの停電の際にはケージが地上に露出している場合は非常事態としてエヴァが自由に行動できるように設定されていた故の出来事であった。

唯一にして最優先で電力を回すように設定されていた故に、このような未曾有の事態においてもエヴァ初号機は悠然として動き続けていた。

ネルフ本部は相も変わらず停電したままである。非常用発電器をフル稼働させても発電するそばから初号機に電力を奪われるため、ＭＡＧＩの再起動どころか非常灯すらつかず、一寸先はまさにお先真っ暗といった状態であった。使徒殲滅か否かもあきらかになっていないほどである――なにせエヴァ初号機が例のビームをブッ放したすぐあとに停電と来たから。

エヴァ初号機はまず甲高い悲鳴の聞こえた方へと、足下に気を使うようにそろりそろりと近づいていった。

二組の小規模な大人の男女の入り交じった集団がいまにも争わんとしていた。悲鳴はそのうちの一方にいたある女性のものであったらしい。

エヴァ初号機はその様をやはり泰然と眺めていた。しかしながらそのうち、ふと気づいたように片手を手刀のようにして、ゆったりとその二組の集団の狭間へとその手を壁にするかのように置いてみせた。

だが結局その動作は無駄になった。二組の集団はエヴァ初号機がそうする間にもすばやく、ネズミか何かのように逃げ散ってしまったからであった。そうして様々なところに隠れた彼らは弱者そのものの様に、自分を捕食せんとする巨人から必死に息をひそめる小人のように、ただ脅威が過ぎ去るのを待っていた。

エヴァ初号機はなにかに気づいたようにして、今度はその手をひらひらと横に振ってみせた。

それでも誰一人として、その姿を現そうとするものはいなかった。

（ーーー）

第四使徒襲来後、ネルフ本部の機能が戻ったのは急なもので使徒殲滅推定時刻より三十分後、事態の収集が絶望的のように思われ始めた頃のことだった。

非常用発電器から電気を一方的に奪い去っていたエヴァ初号機への接続が、唐突に接続先の方から打ち切られたのだった。これによりネルフ本部はＭＡＧＩを再起動し、全システムを再稼働させることができた。

ちょうど通信障害もおさまってきた頃合いであったことにより、ネルフはその強権を発動して戦略自衛軍と警察を特化運用し、この一歩間違えれば世紀末か、惨劇まっしぐらな第三新東京市の狂乱騒動を見事収束させてみせた。

しかしながら、それまでに避難という公的機関による管理を受けていなかった人々が非常時ということで己の知る限りの情報を互いに

共有したこと、紫色の巨人(エヴァンゲリオン)がシェルターという情報から隔離された檻にすら入ることが叶わなかった人々によって期せずして、誤魔化しようのないほどにしっかりと目撃されてしまったことにより、それを操るNERVという何とも怪しげな〝特務機関〟とやらにさまざまな形で注目、あるいは批判が集まり始めたことも、また確かなことだった。

（ーーー）

こうした騒乱の後始末――回収されたエヴァ初号機とその戦闘データの分析から、転居届・被害届の受理やインフラの回復のための工事計画の作成、はてには瓦礫の除去にいたるまでをネルフは委任されることになった。

建前としてはいまだに混乱のみられる現状を省(かえり)みるに、指揮系統や細務は一本化したした方がよいと思われ、当面はいまのままでいいということだというのだが――ようするに面倒を全て、責任をとるべきところからお門違いなところまで、一事が万事を押しつけられたというわけである。

そんなわけで此処(ここ)にネルフ本部は煉獄と相成った。

一日の仕事量は全体で通常(これまで)の約三倍、人によっては五倍から七倍になった。だというのにこれに今回の事案を反省した徹底的な非常事態対応訓練が幾度となく、容赦なく行われ、そのたびに判明するシステムの弱点やら矛盾への対応にも追われ……。

肉体的にも、精神的にも追いつめられてゆくような日々がネルフのスタッフたちを襲った。ネルフ総司令、碇ゲンドウは冬月副司令をともなって予定より数週間早く、月へと視察に出かけた。

こうしてネルフ本部は晴れて〝エピタピオス〟となった。もちろん刻まれる墓碑(エピタフ)は

〝Our Command's in His heaven, but all right with the nevere nding work〟

《総司令なんぞいてもいなくても、変わりやしないこの地獄》
である。
しかしながら如何なる事象にも例外というものが然(しか)りと存在する。
例えば、ジオフロントのとある丘陵において悠々自適に西瓜(スイカ)を「この新世紀にそぐわないことこの上ない」手作業でいちいち「いやらしいぐらいに」丁寧に慈(いつく)しんで育てている、飄々としてどうにも食えない男だとか。
或(ある)いは仕事をしようにも、そもそも本来の仕事が使徒が来ないとなく、では事務仕事となるとガサツな性分が露呈して周囲の足を引っ張り、手を煩わせるためにかえって休んでくれていた方がいいと同僚の同性に当然の事のように言われ、スゴスゴとそのとおりにしたものの、それはそれで手持ち無沙汰で居心地悪いので性懲りもなく自分なりに手伝おうとしたら今度は追い払われるも同然の扱いをうけてむくれ気味の妙齢の美人たる女だとか。
そんな彼らが無事明るさを取り戻したジオフロントにおいて、緑が眩(まぶ)しいスイカ畑で一人はせかせかと農作業に汗を流して、もう一人はそんな男の姿をつまらなそうに、あいかわらずふてくされ気味に眺めているという光景はどうにも妙にしっくりとくるものがあった。

「ま、自分の仕事がないからってああも何度も、それも際限なく訓練をやって同僚部下上司関係なくどつきまわしゃ、そりゃあ疎まれるってもんさ」
「うっさいわね～、どーせあたしはガサツで無神経な脳筋体育会系メスゴリラですよ」
すると、クククッと男がこれはたまらないと言わんばかりに笑みを洩らす。
「それ、リツちゃんに言われたのかい」
女性――ネルフ戦術作戦部作戦局第一課課長、葛城ミサトはその言葉に眉をひそめた。
「ねぇ、もしかしてアンタたちの間であたしってそういう扱いなの」
「おっっとこれは」そういって口笛をピヨッと鳴らしてみせる男――

加持リョウジ。ユーロネルフ担当であったが、このたびの式波・アスカ・ラングレーの日本着任にともなってネルフ本部付となったのだった。

その様子を見て、葛城ミサトはピクピクとしていた己のこめかみを思わずといったふうに抑えてみせた。沈痛、あるいは憤りをおさえているかのようである。

「――ま、アンタたちがどう思おうがあたしの知ったこっちゃないけどね……。リツコじゃないわ、シンジ君……、碇シンジ君にね、ちょっち言われちゃったのよ」

「へぇ」加持の脳内ではじけるような思考が働いた。

「碇シンジ……、マルウドック機関によって選出された、三人目のエヴァパイロット適合者か。しっかしまあ、そんな風に言われちまうなんて、葛城、いったいなにをしでかしたんだ？」

まあ。だいたいは想像できることである。加持はそう思い、予想し、目の前の自身のかつての恋人にして、現同僚たる女子のことを――かつての学生であった頃の生活を思い出し、今でも苦笑以外にしようがないことを可笑しく思った。

「べつに、わたしがズボラだったから、あの子が我慢しきれなくなっただけよ」

「ははは、まァ、なあ」やっぱり。そうしてやはり彼女の生活は昔と大して変わっていないらしい。おかげで俺もずいぶん家事に慣れ親しんだものだったなあ。そう、また思う。

「なによ、納得ってふうなカンジね」

「いやいや。それに葛城、それだけじゃあないんだろう？」

息をのむような、それにしては既に諦めていたかのごとく弱々しい息遣いがした。